

上田市文化財調査報告書

上田市指定文化財

皇子塚古墳発掘調査報告書

——長野県上田市——

上田市教育委員会

1974年12月

序にかえて

上田市教育長 山 墓 真 平

上田市の塩田平は、古代から近世にわたって築かれた政治・文化の面影が今でもそこに見られ、歴史性豊かな土地がらで数多くの文化財に恵まれております。特に古墳については、現在確認されているだけでも 84 か所に及び、全市域に所在するその約 1/3 強を占め、極めて学術的な興がそぞられる地域であります。この塩田平を眺望する大字手塚字金井に立地する皇子塚古墳は、私ども少年時代にこの呼称そのものにさえ不思議に夢をいたかせ、何かすばらしい謎を抱いているものとして印象されておりました。皇子塚古墳は昭和 48 年度市史跡に指定され、その学術的解明が待たれておりましたが、この 4 月から 1 か月にわたりて上田市文化財調査委員の小林幹男先生に調査をお願いし、発掘調査を実施する運びになりました。

調査は、上田高校、上田染丘高校歴史班の方々の協力を得ながら、古墳を覆っていた雑木を伐り除き、石室内の土砂を除去したところ、内部から完形の瓶をはじめ多くの貴重な資料が発見され、古墳の規模など主要な確認がなされました。そしてこの古墳が、この地方に一帯に多く分布する袖なし型横穴式石室をもつ古墳時代後期の円墳であることが判明したのであります。このように学術的にも意義のある文化財は調査の終了にとどまらず、末永く私たちの手で護っていく必要性にせまられるものであります。

所詮、その整備をはじめ、古墳自体の保存対策とあわせて、郷土の文化遺産に対する強い関心と豊かな愛情の喚起を呼びかけて、真に文化を理解していく努力を今後も地道に続けていかねばならないものと、この調査を通じていっそうの確信をもった次第であります。

昭和 49 年 7 月 15 日

目 次

序にかえて 教育長 山極真平	1
例 言	4
図 版	5
I 皇子塚古墳の位置と環境	11
I 発堀調査の経過	14
1 調査の経過	14
2 調査の構成	15
3 調査日誌	16
II 墳丘と石室の構造	18
1 墳丘の規模と構造	18
2 石室の規模と構造	20
III 出土遺物	22
1 遺物の出土状態	22
2 装身具	24
3 武器・馬具	26
4 土器	27
5 「穴」字墨書のある石器	30
6 古銭	30
IV 考察	31
あとがき	37

図 版 目 次

図版 1	皇子塚古墳の環境	5
図版 2	皇子塚古墳の近景	6
図版 3	皇子塚古墳の全景	7
図版 4	遺物の出土状態	8
図版 5	出土 遺 物 (1)	9
図版 6	出土 遺 物 (2)	10

挿 図 目 次

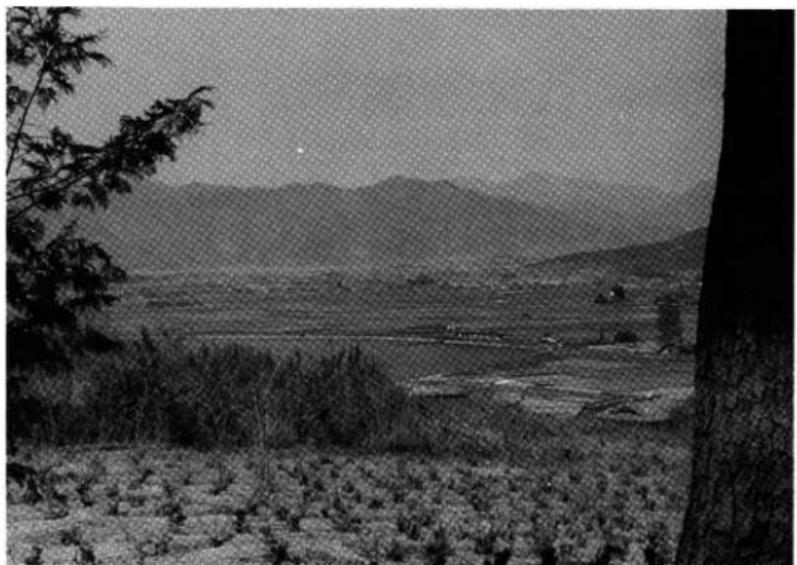
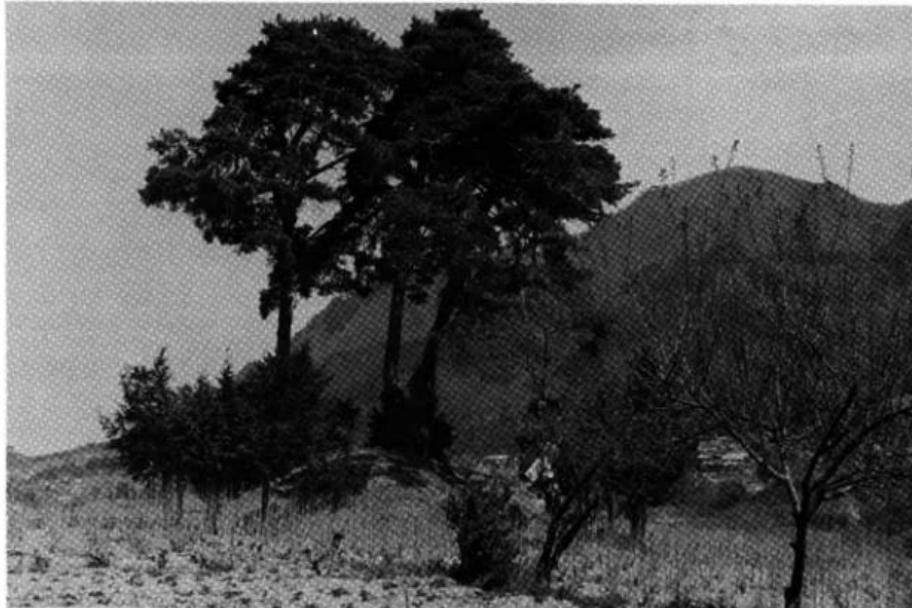
第 1 図	皇子塚古墳と周辺の遺跡	11
第 2 図	皇子塚古墳墳丘実測図	19
第 3 図	皇子塚古墳 石室実測図 (1)	20
第 4 図	皇子塚古墳 石室実測図 (2)	21
第 5 図	出土遺物実測図 (1)	24
第 6 図	出土遺物実測図 (2)	26
第 7 図	出土遺物実測図 (3)	29

例　　言

- 本書は、上田市大字手塚字王字塚480-2番地に所在する上田市指定文化財「皇子塚古墳」の発掘調査、ならびに出土遺物に関する報告書である。
- この調査は、皇子塚古墳が上田市指定文化財となったのを機会に（昭和48年4月9日指定）、上田市教育委員会が主体となって、一部崩落の危険が予知された石室の保全と、墳丘の整備を目的として実施したものである。
- 発掘調査は、上田市文化財調査委員の小林が担当し、上田高等学校郷土研究班と上田染谷丘高等学校歴史班の諸君の協力の下に、昭和49年4月7日から5月6日の約1ヶ月の休日等を利用して、延7日間を要して行なわれた。
- 墳丘の測量と石室の実測は、全員が分担して行ない、小林が調整してトレシした。また、出土遺物の整理・実測・拓本・写真の撮影は、高校生諸君の協力を得て小林が行なった。
- 本書の執筆・編集は、上田市教育委員会と連絡をとりながら、発掘担当者である小林が、すべて行なうことになった。
- 今回の調査には、春の連休などを返上して、延60人にもおよぶ多くの高校生諸君が参加し、献身的に努力して調査に協力してくれた。また、地元の皆さんからは、あたたかいご支援とご配慮をいただき、上田市教育委員会文化係の皆さんには、調査の円滑な運営と実施のために、周到な準備と配慮をいただいた。

こうして調査は、早春の塩田平を望みながら、快適な条件の下で順調に行なわれた。この調査が予期以上の成果を収めて、無事終了できたのは、これらの多くの皆さんのご協力と献身的な努力の賜物である。ここに報告書を作成するにあたり、心から敬意と謝意を表するものである。

1974年9月 小林幹男



図版1 皇子塚古墳の環境

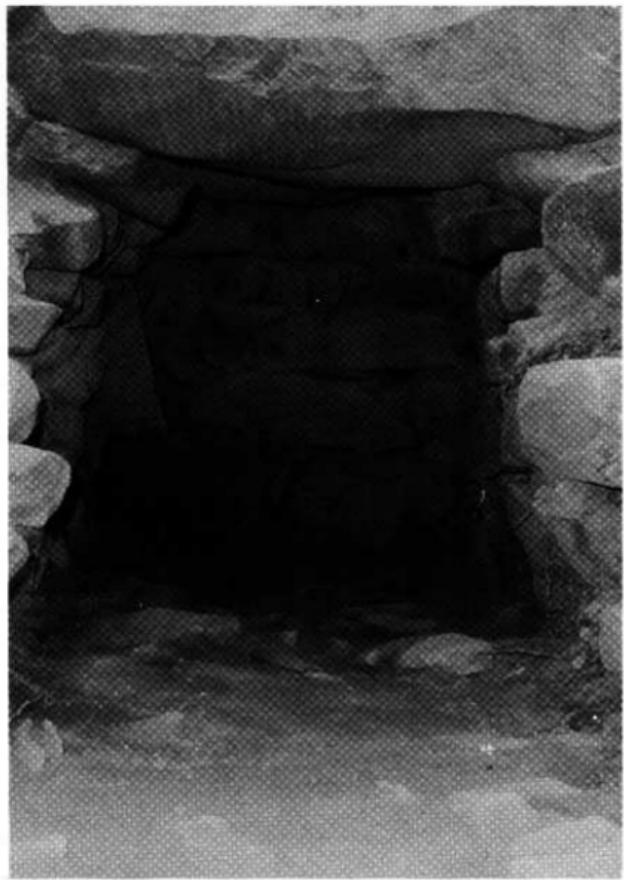
(上)皇子塚古墳遠望 (下)墳頂より塩田平を望む

図版2

皇子塚古墳の近景

(左)調査前の玄門部 (右)調査終了時の玄門部



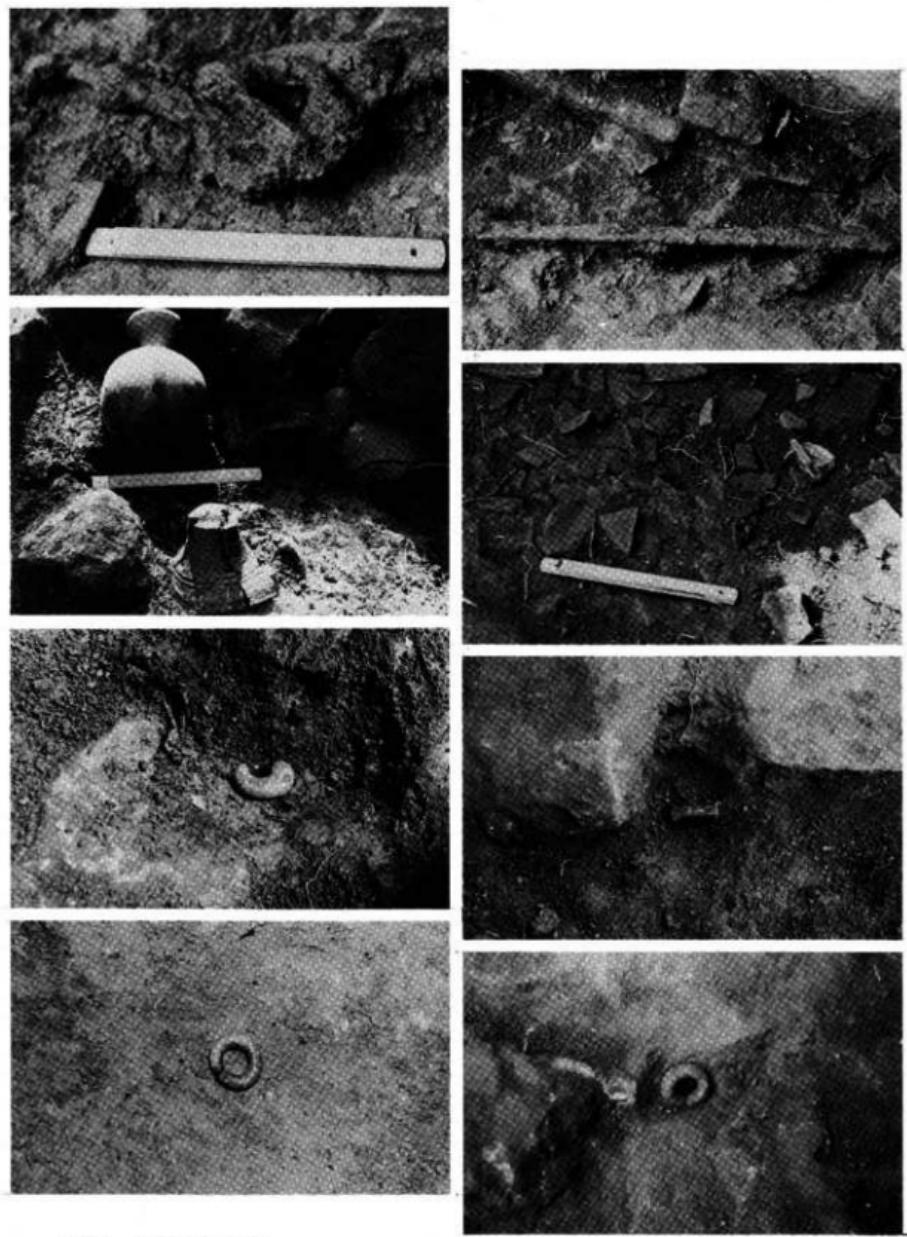


図版 3

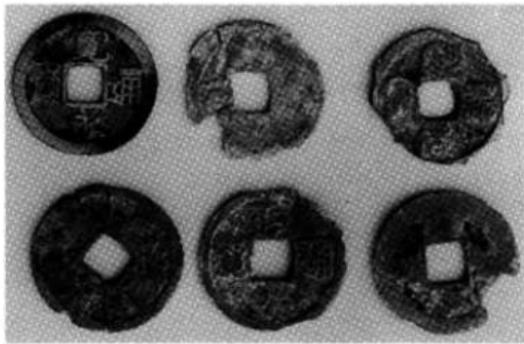
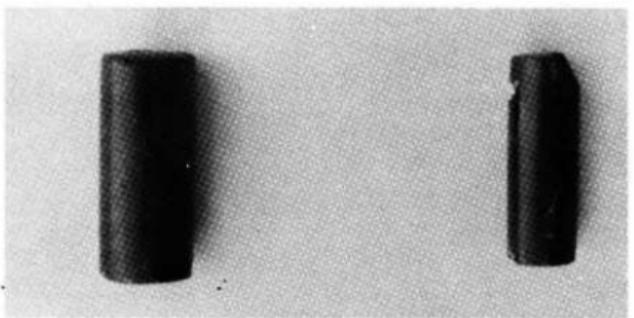
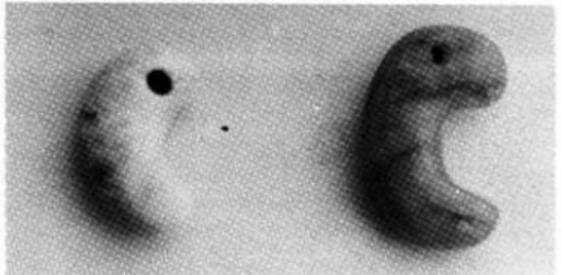
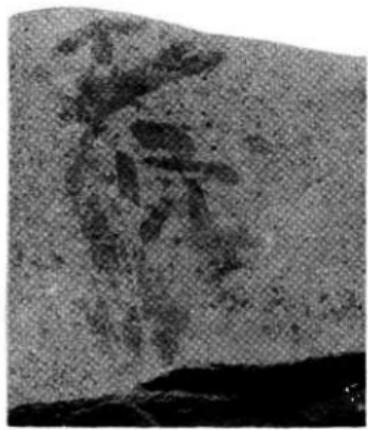
皇子塚古墳の全景

(山 (南より写す)

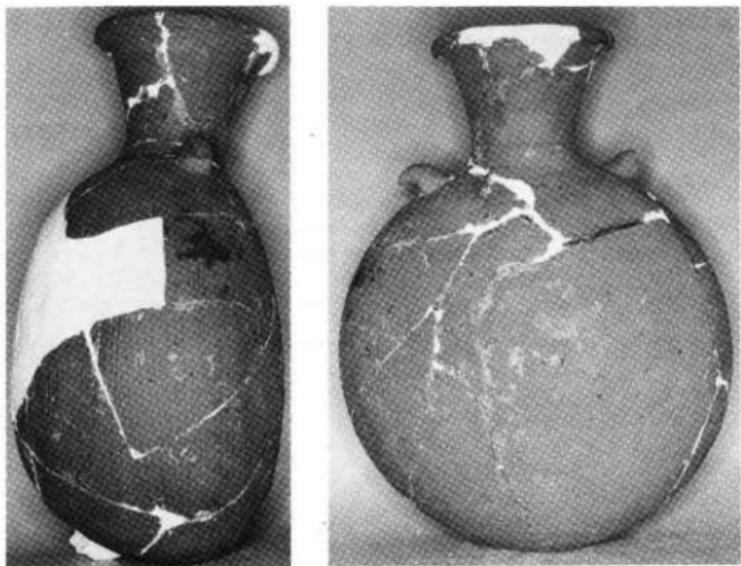
石室 (羨門より写す)



図版 4 遺物の出土状態



図版5 出土遺物(1)

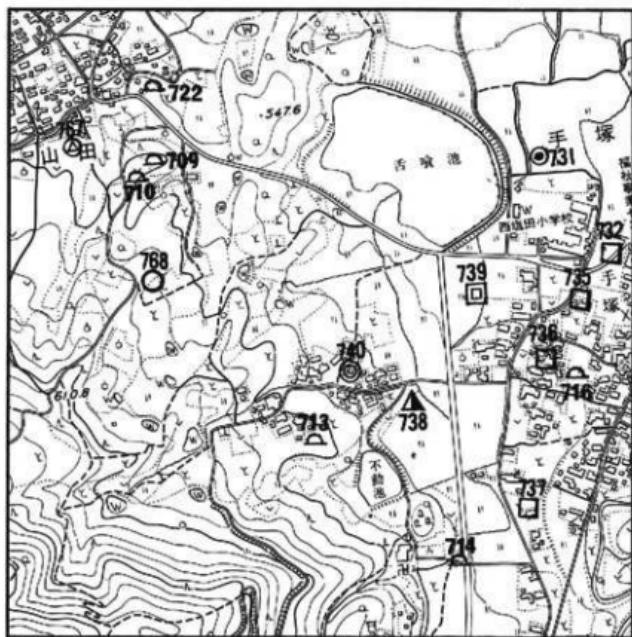


図版 6 出土遺物(2)



I 皇子塚古墳の位置と環境

皇子塚古墳は、塩田平を一望のもとにおさめる上田市大字手塚字王子塚 480—2番地のテラス状台地の先端部脊梁上に所在する古墳時代後期の円墳である。皇子塚古墳への道は、国鉄信越線の上田駅前から、千曲バスの別所線におよそ30分ほど乗って、西塩田の



第1図 皇子塚古墳と周辺の遺跡 1:10,000

古 墳	709・710 上ノ山塚第1・2号	718 皇子塚古墳	714
	クチアケ塚	722 ピワ塚	
遺 跡	716 東糀屋村古墳	731 五反田	732 堀ノ口一
		738 桶ノ口	735 立石
		737 沢沢	736 東糀屋村
		767 櫛木	739 西糀屋村
		768 上打越	740 金井

金井で下車し、南方へだらだらと続く小道を10分ほど進むと、金井集落の中央に達するが、古墳はその南西隅にあたる標高およそ550m付近の台地上にある。集落のある地籍は、女神塙東館に発達した扇状地の扇頂部に位置している。また、古墳のある台地の南側も、深く開折されて、その末端に不動池がつくられている。塩田平の南西隅に位置するこの台地は、両側をえぐられて舌状となり、盆地を一望する絶好の立地条件にある。このきわめて恵まれた位置に築かれた皇子塙古墳は、どのような人の墳墓であったか明らかではないが、東隣りにかなり規模の大きい社があり、「皇子稚現」を祀っていたという。その後この社は、明治41(1908)年に八幡神社の境内に移転され、その跡は現在桑畠になっている。そしてこの地籍から今回の調査によって、少量の鬼高窓の土器器が採集されている。

この古墳は、現在「皇子塙」と呼ばれているが、古くは「王子塙」とも書き、「かみやむろ」とも呼ばれていた。因に、小字名は現在も王子塙と称している。この古墳が、いつ頃から「皇子塙」と呼ばれたのか詳らかでない。しかし、この古墳の北東約1・2kmの王子神社境内にも「王子塙」と称される古墳があるので、恐らくこれと混同しないための呼称であろう。

王子塙古墳は、里伝に新田部親王の子氷上塙焼王が葬ったとあり、明治31年王子神社に塙焼王が合祀されている。⁽³⁾また、皇子塙古墳には、塙焼王の子某が葬られたともいう。⁽⁴⁾しかし塙焼王は、天平宝字8(764)年の藤原仲麻呂の謀反に際して捕立され、一党と共に斬られたとあるから、これがどのような経過で信濃の王子塙と関連したのか明らかでない。また、皇子塙に葬られたという王の子某が、塙焼王と不破内親王の間に生れた子氷上志計志麻呂であったのか判然としないが、この王子は、不破内親王が不敬罪によって京から追放されたときに、遠流に処せられ、土佐國に配されている。小山真男氏は、この伝承について、古墳の築造年代の考察から否定している。⁽⁵⁾もし仮にこの年代に追葬があったとしても、他の一族の墓に王が葬られるなど、不合理な問題が生ずるが、今回調査した皇子塙では、この時期の追葬は認められていない。以上の事実から、この被埋葬者の伝承は、少くとも史実とは考えられない。しかしこうした伝承の骨組は、多くの場合なんらかの事実を反映しながら著名な話と交錯してフィクションされている。この場合も、例えば国造的勢力の国衙に対する反抗とか、中央の大事件に関連するような事件があり、それを塙焼王がいくつかの著名な政変に関係していたことなどから符合させて構成したものとも考えられる。

皇子塙古墳のマウンドに立てば、東南方には産川を隔てて峻嶺たる狹削の山脈が、四季

こもごもの装いをこらして速なり、特に早春の新緑と晩秋の紅葉の季節が美しい。さらに東方から北方へと眼を移せば、塙田平に岬のようにのびる小牧山塊の彼方に、悠揚と白い煙をたなびかせる浅間火山とその山脈、そして神川の峡谷をはさんで、上田盆地の象徴といわれる太郎の山脈が続いている。

塙田平の周囲には、独鉢山脈・小牧山塊・西部山地などが速なり、内陸的な気象を呈しているため、南方から北方に向かって狭隘となる扇状の盆地の中に、大小100にもおよぶ溜池がつくられている。しかし、また塙田平には、数多くの小河川があり、独鉢の山裾を貫流して北東流する産川を主軸として、東山麓の尾根川・西山麓の湯川、その下流の縦合線を東に尻無川・西に追間沢川などの流れが大地を潤して、優れた文化を育んできた。

塙田平は、「信州の鎌倉」と呼ばれるように、中世の文化遺産が多い。しかし、また「町全体が歴史博物」ともいわれるよう、原始社会以来の歴史の宝庫である。上田市教育委員会が、昭和46年以来3年余りの歳月を要して実施した上田市全域の埋蔵文化財分布調査によれば、塙田平の遺跡数は、各期を含め190、古墳は確認されたものだけでも84基におよんでいる。この分布数を上田市全域のものと比較して示せば、遺跡数では31.8%、古墳では40%にあたり、特に縄文期の遺跡では43.6%、弥生期では52%、古墳時代では43.7%に達し、まさに歴史の宝庫といふことができる。

また、これらの遺跡の分布を地図上で概観すれば、その大部分が産川流域にあり、これに次いで尾根川流域・湯川流域の順となっている。そして古墳は、これらの支配地を眺望し、かつ南面して日当りのよい小牧山塊の東山一帯に多く、皇子塚古墳の付近には、産川西岸のクチアケ塚・東糸屋村古墳の2基と東岸の宮原第1・第2号墳の2基、そして山田地蔵などにわざかに分布している。また、皇子塚周辺の遺跡は、台地の斜面と産川の両岸にわたって広く分布し、縄文中期初頭ごろから弥生後期の箱清水期、さらに古墳時代から歴史時代にわたる複合遺跡が多く、遺物の量も豊富である。

このように豊かな経済力が育まれてきた塙田平には、いち早く古代の政治権力が発生し、成長してきたものと思われる。しかし古墳に象徴される早い時期の政治権力は、わずかに古墳時代中期後半と推定される王子塚古墳のみである。現在のところ、それ以上にさかのほることも、それ以上の規模・数の古墳を求めることもできていない。多くの疑問を残すこの課題については、今後の研究の進展によって解明されることを期待したい。

註1 塙田町「信州の鎌倉 塙田」昭和42年 塙田町

註2 長野県「長野県町村誌 東信篇」昭和11年 長野県町村誌刊行会

- 註 3 註 1 と同じ。新田部親王の孫水上塙焼王とあるが、新田部親王の子と思う。
- 註 4 註 2 と同じ
- 註 5 「統日本紀 岸仁天皇天平宝字 8 年 9 月 29 日の条」(新訂増補国史大系)吉川弘文館
- 註 6 「統日本紀 秋穗天皇神護景雲 3 年 5 月 25 日の条」上掲書
- 註 7 小山真夫「小県郡史」大正 11 年 小県時報局
- 註 8 小林幹男「上田市の原始・古代文化」1974 年 上田市教育委員会

II 発 墓 調 査 の 経 過

I 調査の経過

皇子塚古墳は、すでに明治以前に盗掘されていたらしい。また、この地方では、王子塚古墳とならんでよく知られている古墳である。この古墳の扱いについては、旧塙田町のところにも、議題になったと聞いている。この旧塙田町が昭和 45 年に上田市と合併して、まず(1)新町字王子 9 番地の王子塚古墳が市指定文化財となり(昭和 46 年 4 月 8 日指定)、続いて昭和 47 年 6 月 8 日には、下之郷字塙穴原 812-44 番地の他田塚古墳が市指定文化財となつた。⁽²⁾この 2 基の古墳が、指定文化財になると、次いで皇子塚古墳の扱いが話題にのぼった。

上田市文化財調査委員会では、上記のような経過から、この古墳を指定文化財候補物件として調査することになり、この調査を小林が担当することになった。その後、上田梁谷丘高等学校歴史部の諸君の協力を得ながら、古墳の保存状態・規模・構造などを度数にわたりて調査し、基礎的な計測を行なって報告書を作成した。この結果は、昭和 48 年 4 月 2 日の調査委員会で審議され、上田市指定文化財候補物件として上田市教育委員会に答申された。その後、上田市教育委員会では、昭和 48 年 4 月 9 日に市指定文化財とすることに決定した。

調査着手前の皇子塚古墳は、墳丘全体が植木で覆われて、形状を判別することさえ困難なほどであった。また、石室は後部の天井石が失われて、側壁の積石上面まで完全に埋没し、玄門部からようやく這って玄室内へ出入できる状態であった。また、玄室内では、西側壁部の積石が、一部大きく前面にせり出し、早急に補強の必要が認められた。

今回の調査は、このような状況にあった皇子塚古墳に対して、市指定文化財としての環

境の整備と、側壁の保全・石室内の清掃を目的として行なわれた。調査はまず墳丘上の雜木を伐採することからはじめられた。しかしこの作業は、すでに雜木の多くがかなりの樹齢に達し、そこに藤蔓がからまつて、一同手にまめを作つて懸命に努力したが、相当厳しい難作業となつた。伐採作業が完了すると、墳丘の状態を記録するために、30cmのコンター・ラインによって測量図を作成し、引き続いて自然堆積した落葉等を除去する作業を行なつた。

石室の調査は、まず羨道部と前庭部に崩落した土砂を除去する作業から着手し、しだいに水平に掘り下けた。上層部の層序的変化は明確でなく、およそ1mほど掘り下けた地層から、中世の内耳土器片と焼土層が検出され、この古墳が開口後に住居のような役割を果していたことが推考された。また、玄室内では、およそ30cmほど掘り下けた地層から、寛永通宝等が出土し、さらに15cmほど掘り下げるとき、羨道部とおよそ水平のレベルから内耳土器片と焼土層が検出された。この地層はきわめて硬く、ようやくつるはしによって尋いで掘り下げ、およそ15~20cmで床面の敷石に達した。

出土遺物は、葬身具⁽³⁾、武器・馬具・土器・古鏡などで、かつて小玉の出土が伝えられているが、量としては少なく、盜掘による隠滅が考えられる。しかし前庭部から検出された完形の細頸瓶と、「穴」字の書かれた石皿の発見は、今回の調査の特筆すべきものといえるだろう。

調査はさらに墳丘の周囲の追究と確認、30cmコンターラインによる墳丘の測量、石室の実測を行なつて、無事終了した。なお、周囲の調査は、部分的に着手したが、調査可能な地点が狭小で、私有地の柵株に達するため、確認するまでの調査は行なわれなかつた。

註1 武沢武登 東川多寿男「王子塚」上田市指定文化財調査報告書 上田市教育委員会

註2 小林幹男「他田塚古墳」上田市指定文化財調査報告書8 上田市教育委員会

小林幹男「他田塚古墳発掘調査報告書」昭和48年 上田市教育委員会

註3 信濃史料刊行会「信濃考古綜覧 上巻」昭和31年 信濃史料刊行会

II 調査の構成

(1) 発掘調査の実施主体 上田市教育委員会

(2) 調査班の構成

調査担当者(調査主任)	小林幹男	上田市文化財調査委員 日本考古学协会会员
調査員	小野仁志	長野県上田高等学校教諭 上小考古学研究会会員
参加者	白井恒文	長野県上田染谷丘高等学校教諭 上小考古学研究会会員
(団体)		長野県上田高等学校郷土研究班 長野県上田染谷丘高等学校歴史班
(3) 調査事務局		上田市教育委員会事務局

II 調査日誌

4月7日 (日) 晴後雨

調査方法を話し合った後、前庭部から伐採をはじめる。墳丘上は雑木に藤蔓がからんで、作業は困難をきわめた。高校生の諸君は、何人かが手にまめを作りながらも、懸命に作業を続けた。墳頂部の作業が、ようやく8時ごろまでに終了し、萌木のかおりと早春の塩田平の眺めが、一同の疲れをいやしてくれた。伐採した雑木の処理ができないため、前庭部で焼却処分することにした。しかし大量の雑木を焼いたため、なかなか消火できないで難燃する。幸い夕刻から夕立になり、ようやく作業を打ち切って帰路につく。

4月28日 (日) 薄曇

今日から連休を利用して、本格的な調査に入る。30余人の調査班を8班に分けて、第1班は80cmのコンター・ラインで墳丘の現状を測量した後、墳頂部から精査に着手する。墳頂部は盛土部分までかなりかなり流失していることが認められた。

第2班は周辺の雑木を伐採した後、周縁の精査に着手する。調査は北側に幅1m、長さ3mのAトレチ(A1~A3)と幅1m、長さ4mのBトレチ(B1~B4)を設定して、周縁と周縁の調査を行なう。夕刻までに葺石を伴う周縁を確認したが、調査可能な地区が狭小なためもあって、周縁は明らかにできなかった。他の地点はさらに私有地の柵に接近しているため、周縁の追究を断念する。

第3班は前庭部の灰を片付けた後、談道部の崩土の除去から調査に着手する。作業終了時までに約60cmほど掘り下げる。また、談道部のレベルに合わせて、玄室の発掘を進め、玄門部で約40cm、奥壁部で約20cmほど掘り下げる。奥壁部付近は、かなり攪拌さ

れでいることが明らかになる。

出土遺物は、崩土中から寛永通宝と土師器の破片数片であった。

4月29日（月） 曇後晴

前日の作業を継続し、周辺の追求と墳丘の精査は、夕刻までにほとんど完了する。美道部の調査は、さらに進んでおよそ10cmほど掘り下げる。玄室内の調査もほぼこれと平行して進み、奥壁寄りの1mほどがわずかに残る程度となつた。

本日調査された部分の最下層の隧道部（奥壁より520cm、西壁際より70cm付近）と玄室内（奥壁より410cm、西壁際より50cm付近）に、大量の内耳土器片が発見され、さらに周辺にかなりの炭化物が検出された。しかし作業終了の時間が迫り、本日の収容作業は見合せ、遺物を土砂で覆って作業を終了する。

5月8日（金） 晴

今日はよく晴わたって、独鈷山の萌木と浅間山の遠景が美しい。作業の全力を石室の調査に集中し、玄室内と美道部の2班で精査する。29日に発見された地点の内耳土器片は、合計324点を数え、その脇から2箇所とも広範な炭化物の層と焼土層を検出した。焼土層は僅40cmほどで、いずれもかなりの期間にわたって火を焚いていたことが、その層の厚さからうかがわれた。

この部分を精査した後、この層を掘り削って、およそ15～20cmほど掘り下げる、床面の敷石に達し、その敷石の間から金環2、勾玉2、管玉2などの商賈品が検出された。また直刀1、鉄鎌片5などの武器と轡は、玄門部の西壁際から、さらに完形の細頸瓶と破片になった提瓶、器台と高杯は美道部の西壁際からそれぞれ検出された。また、提瓶の破片の上に、これを押し潰して、「穴」字墨書きのある石皿を発見し注目された。

5月4日（土） 晴

今日から墳丘の測量と石室の精査を平行して行なう。石室の精査は夕刻までに終了し、墳丘の測量は周辺部分を残してほぼ完了する。本日は出土遺物なし。

N H K・S B C・毎日新聞・信濃毎日新聞・読売新聞等が取材する。

5月5日（日） 曇時々小雨後晴

墳丘の測量を午前中に完了し、平行して行なった石室の実測に主力を注ぐ。夕刻までに床面と西壁面の実測を完了して、本日の作業を終了する。

5月6日（月） 晴

前日の実測作業を継続し、夕刻までに全作業を完了する。今日も美しく晴わたって、皇子塚古墳の被埋葬者が眺めたであろう塩田平は、春の光に照り映えていた。

III 墳丘と石室の構造

I 墳丘の規模と構造

皇子塚古墳の墳丘は、後述部の損傷に伴って、一部が破壊・変形されているが、盛土によって構築されている古墳時代後期の円墳である。里伝によれば、かつては墳丘上に4本の松があり、土地の人びとは、この古墳のある地蔵を「4本松」とも呼んでいる。しかし4本の松は、その後1本が失われて、現在は3本だけが残り、わずかに以前の面影を伝えている(図版1)。

墳丘の規模は、東西径と南北径がともに14.8m、高さが3.8mである(第2図)。

墳頂よりの距離	基点	1 m	2 m	3 m	4 m	5 m	6 m	7 m
南麓の東西径		15.2	15.16	14.5	13.6	12.3	9.5	4.0
北麓の東西径	14.9	14.5	13.8	13.0	11.6	10.5	8.2	4.0

第1表 皇子塚古墳の墳丘計測値(東西径)

上表は墳頂を基点として、墳丘の東西径を石室の中心軸に沿って南、および北側へ1mごとの間隔で計測し、表示したものである。

上表および第1図で明らかかなおり、墳丘の形態は、北麓に対して南麓の東西径が大きい鉈状を呈している。従って80cmごとのセンター・ラインは、北麓では弧を描いているが、後述部のある南麓では直線に近い鋸円状となっている。

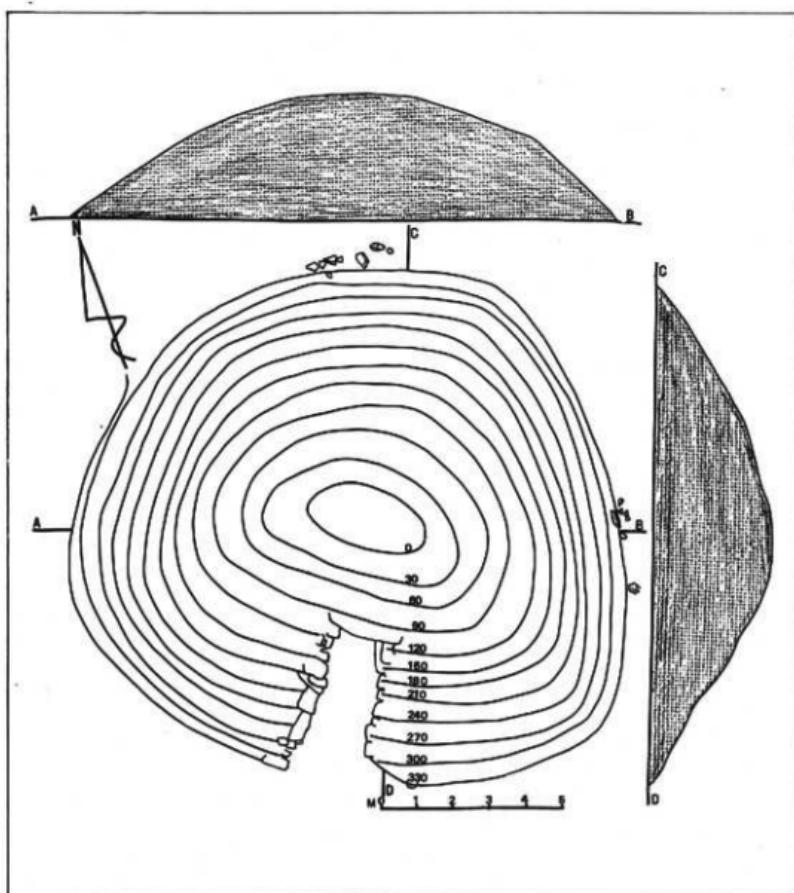
墳丘の構造は、盛土によって構築され、中腹には葺石は認められないが、周縁の末端には、多くの面のある自然石を用いて葺石としている。また、地形的にみて、墳丘の盛土は周囲の土砂を用いて構築し、その跡が周溝となっているものと思われる。しかし前述のとおり今回の調査では確認されていない。この点については、今後のよい機会を利用して、私有地を含めた調査を行ない、周溝の所在を確認するとともに、古墳の範囲を確定しておきたいものである。しかしこの部分は、幸い厚い覆土によって保護され、また、近い将来に開発・破壊の危険はないといわれる。

皇子塚古墳は、以上の点を総合してみると、古墳時代後期のCクラスの円墳であり、墳丘の形態にその特色を認められるほかは、最近調査された下之郷の他田塚古墳、下室賀の

神宮寺古墳⁽¹⁾ 和の蛇川原古墳⁽²⁾と比較してみても、これらの古墳より規模は小さい。

註1 小林幹男「神宮寺古墳調査報告書」1974 上田市教育委員会

註2 小林幹男「蛇川原古墳緊急発掘調査報告書」1974 東部町教育委員会



第2図 皇子塚古墳墳丘実測図

2 石室の規模と構造

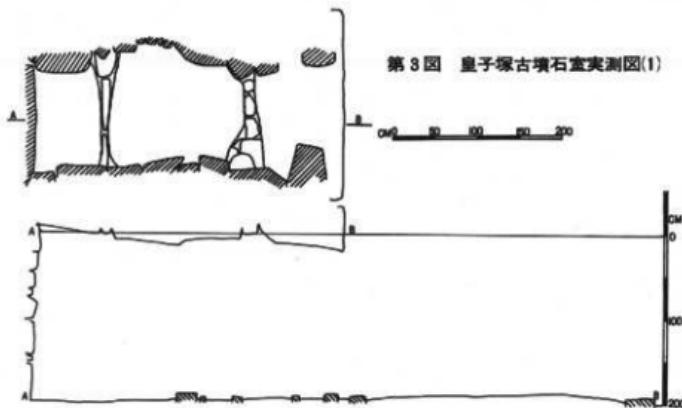
皇子塚古墳の石室は、古墳時代終末期の短軸な箱形のプランをもつ袖なし型横穴式石室である。石室の規模は、奥壁幅が2・02m、奥行き全長が6・10m、玄門部幅が1・62m、玄室の奥行き全長が4・00m、羨門部幅が1・48m、羨門部奥行き全長が2・10m、奥壁部の高さが2・08m、玄門部の高さが1・72mである。床面のプランは、第2表のとおり、奥壁より1m付近が最大幅で、そこから羨門部に向ってだいに狭小となり、前庭部はSW34°にラッパ状に開口している。

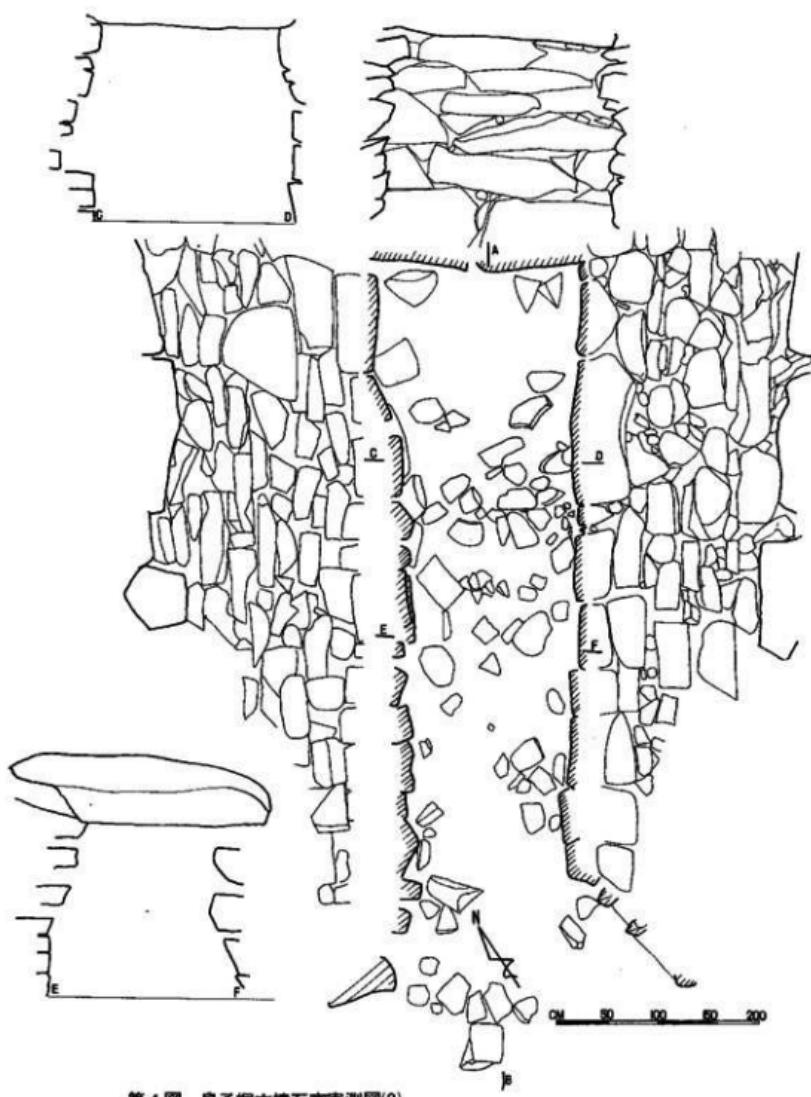
奥壁より	1 m	2 m	3 m	4 m	5 m	6 m	周幅
床面幅 m	2.04	1.67	1.67	1.62	1.55	1.65	2.82
高さ m	1.92	1.90	1.82	—	—	—	—
石室内の位置	←———— 玄 室 —————→				← 羨 道 →	← 前 庭	

第2表 皇子塚古墳石室の規模

石室の石積みは、面のある自然石を乱積み状に小口積みにして構築し、玄室部では5°、羨道部玄門寄りでは12°の勾配をもって、天井に向かって縮約している。しかし、羨道部の石積みは、大部分が既に崩壊しているために遊び去られ、規模・構造を明らかにすることはできない。石室の積石は、奥壁部と側壁の基礎にやや大き目の石を用いているが、全

第3図 皇子塚古墳石室実測図(1)





第4図 皇子塚古墳石室実測図(2)

般に周辺の古墳より小さく、皇子塚古墳の時期的特色を示している。

床面の敷石は、比較的平らな自然石を用いているが、盃壺などによって微去されているらしく、部分的に全く失われている。また、天井石は、玄室部に大きな平石を8枚のせて構築しているが、羨道部は側壁の積石とともに、すべて失われている。

また、前庭部西側壁寄りには、規則的に配置された敷石があり、その間から墓前祭に使われたと思われる須恵器（細頸瓶・提瓶・高杯）が検出されている。

床面の敷石の上層およそ15～20cmで検出された焼土層は、併出した内耳土器片などからみて石室がなんらかの事情によって開口され、崩土が堆積した後に、かなりの期間にわたって住居などに利用されていたことが考えられる。この地層は、上面が踏み固められて非常に硬く、ようやくつるはしを使って掘り割るほどであった。焼土層は、奥壁より、410cmの玄門部付近と、520cm付近の羨道部の2箇所から検出され、いずれも直徑が40cmほどにわたって、かなりの厚さの焼土が認められた。

IV 出 土 遺 物

1 遺物の出土状態

皇子塚古墳の出土遺物は、金環・瑪瑙（Agate）製勾玉・碧玉（Jasper）製管玉などの装身具、鉄製直刀・鉄鎌などの武器、櫛・細頸瓶・提瓶・器台形土器・高杯などの須恵器、土師器片、弥生式土器片（後期箱清水期）、内耳土器片、古錢などであり、特に「穴」字墨書のある石皿の出土は、今回の出土遺物中で最も注目されるものであった。⁽¹⁾また、「信濃資料」は、皇子塚古墳の既出遺物として、小玉の出土を記載している。

なお、遺物の出土地點は、下表のとおりであるが、表中の距離の数値は、奥壁よりの距離（E）—東壁よりの距離、（W）—西壁よりの距離で示した。出土遺物の検出された層位は、古錢が覆土中から、内耳土器片が床面より15～20cm上の地層から検出されたほかは、いずれも床面の敷石の間などから発見されている。

また、下表の出土遺物名に併記した数字は、出土遺物の整理のため付したもので、遺物を特定するため表中に記載した。

第3表 皇子塚古墳遺物の出土地点（単位 CM）

a 装身具

遺物名	金環8	金環4	勾玉5	勾玉6	管玉7	管玉8
奥壁より	125	360	322	382	250	361
側壁より	E-23	W-45	E-83	E-43	E-35	E-65
出土位置	玄室					

b 武器・馬具・須恵器・墨書きのある石

遺物名	直刀14	鉄鎌16	轡15	瓶・高环	墨書き石
奥壁より	840～	337	330	725付近	725
側壁より	W-5	W-5	W-8	W-18付近	W-18
出土位置	玄室			羨門	

c 内耳土器・古鏡・赤生式土器

遺物名	内耳土器	内耳土器	古鏡	赤生式土器
奥壁より	410	520	90	250
側壁より	W-50	W-70	W-10	W-20
出土位置	玄門	羨道	玄室	

須恵器は、羨門部の西壁際に細頸瓶が口辺部を側壁に向けておかれ、その北脇に提瓶の破片が側壁の積石に押し潰された状態で検出された。そして、器台形土器の杯部は、その東隣りに口辺部を下にしておかれ、器台部は完全に失われていた。また、「穴」字の墨書きのある石皿の破片は、提瓶の上にかぶさるような状態で発見された。

その上層15～20cmの羨道、および玄門部で検出された内耳土器は、焼土層の脇にいずれも小破片となって、土器だまりのような状態で検出された。この土器は、復元の結果

浅鉢形土器 2 個体分であることが判明した。この他、玄室の覆土の中から、赤色塗彩のある弥生後期の高环の小破片 4 片と、土器器の环形土器片 14 点が検出されている。

また、墳丘の北壁と東壁の周辺からは、施釉陶器の壺形土器片と須恵器の杯・瓶・蓋などの破片が少量検出されている。

註 1 信濃史料刊行会 「信濃史料 第 1 卷上」 信濃史料刊行会

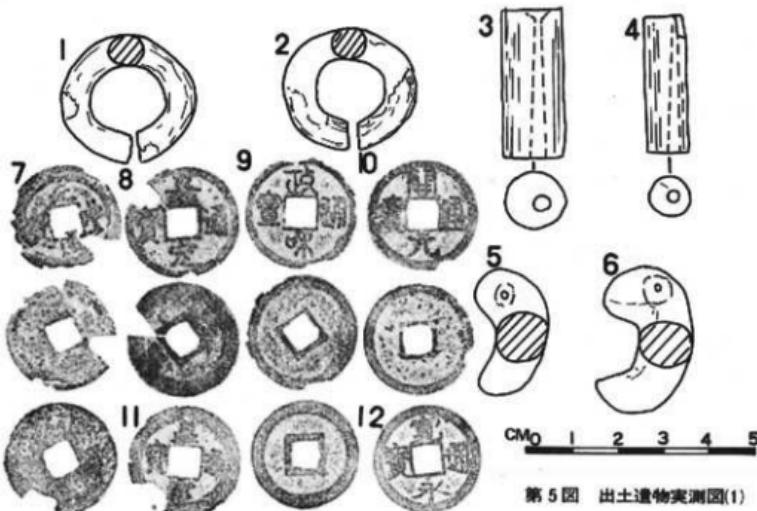
2 装身具 (第 5 図)

この古墳から検出された装身具は、瑪瑙製勾玉 2 個、碧玉製管玉 2 個、金環 2 個などである。「信濃史料」によれば、状態は明らかでないが、かつて小玉を出土したといわれる。石室を調査した時点の所見では、玄室部の奥壁寄りの攪拌が甚しく、多くの部分で床面の敷石が除去されており、かなりの副葬品がすでに滅失しているものと思われる。

(1) 勾玉 (第 5 図)

検出された 2 個の勾玉の材質は、樹枝瑪瑙 (moss agate-5) と、紅縞瑪瑙 (sardonyx-6) であり、前者は乳白色地に淡緑色の枝紋が走り、後者は黄白色地に淡紅縞の縞紋がハケ状に認められる。

5 は短幅な「C」字形を呈し、よく研磨されている。穿孔は「C」字上部に行なわれて



第 5 図 出土遺物実測図(1)

いるが、二次的穿孔の痕跡はない。6は「コ」の字形を呈し、内側がやや角形に研磨されている。穿孔は「コ」の字形の裏面上部から行なわれ、末端の周縁は広く円形に削られている。

No	全長 mm	頭 部 (末端より5mm)			腹 部			尾 部 (末端より5mm)			孔の大きさ 形式	色調
		幅 mm	形状	厚さ mm	幅 mm	形 状	幅 mm	形 状	大径 mm	小径 mm		
5	28.0	11.0	丸形	8.5	11.0	両側 緩いカーブ	9.0	丸 い	8.8	1.5	C字	淡緑色 樹枝状
6	32.0	10.5	丸形	7.0	12.0	外緩いカーブ 内 直 線	8.0	太い嘴状	2.5	1.5	コの字	淡黄色 絹紋

第4表 勾玉の形状と計測値

(2) 管玉 (第5図)

材質はいずれも濃緑色の碧玉でつくられ、3はやや太形の円筒形、4は細身の円筒形である。穿孔は円心よりわずか綠辺に片寄り、一方から主に工作されて、3の末端の周縁は広く円形に削られて研磨され、4の末端は半円形に深く剝離している。器面はよく研磨されてつやがあり、なめらかに調整されている。

	長さ mm	上面径 mm	下面径 mm	上面孔径 mm	下面孔径 mm	二次的穿孔
3	32.5	13.0	13.0	3.0	1.0	あり
4	30.0	8.5	9.0	2.5	1.0	なし

第5表 管玉の計測値

(3) 金環 (第6図)

2個の金環は、いずれも銅地金に金箔をはり、全面縁背に覆われているが、部分的に鮮やかな金色を呈し、製作時の面影をとどめている。2個はほぼ同規模で、わずかに椭円形につけられ、環末端の間隙は、1が内側で1・5mmに対して、外側で3mmとわずか開き、2は両端とも2・5mmと平行につくられている。

No	G.M	長 径	短 径	内 長 径	内 短 径	幅	厚 さ
1		3.0	2.8	1.65	1.5	0.65	0.75
2		2.9	2.65	1.5	1.35	0.65	0.75

第6表 金環の計測値

3 武器・馬具（第6図）

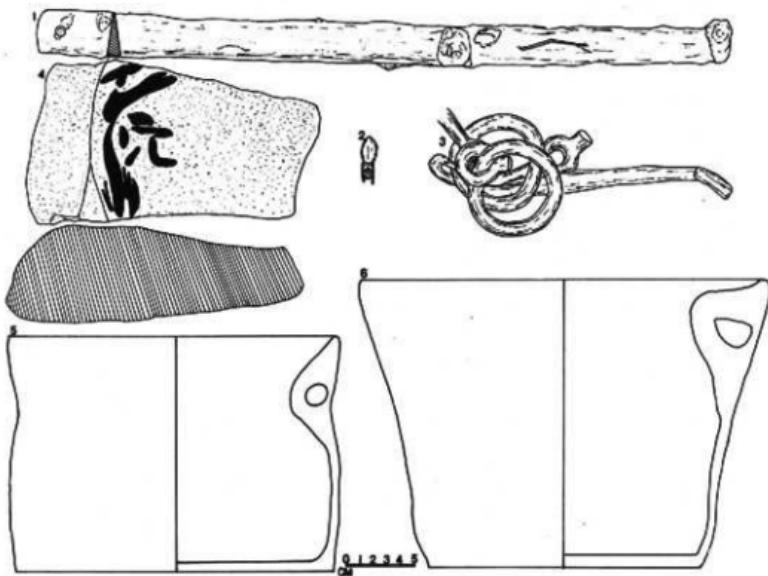
皇子塚古墳から検出した武器は、切先部が欠損した鉄製直刀1振と、柳葉式平根鎌の破片、茎の破片など5点である。馬具は直刀脇から検出された轡1個だけである。

(1) 鉄製直刀（大刀）（第6図1）

現全長が50・5cm、平様平造りで、身の断面が二等辺三角形を呈し、刀身幅が2・9cm、棟厚が0・9cmである。切先部は失われているが、茎尻は平山型の張った栗尻で、茎は振袖型である。持えの細部は、刀身全体がかなり腐食しているため明らかでない。

(2) 鉄 鎌（第6図2）

柳葉式の平根鎌鉋部1点と身・茎などの破片で、全体の形状は明らかでない。鉋部の幅は1・1cm、厚さが0・6cm、身の太さは0・8cm×0・7cmで丸形である。茎は丸形で細い繊維が付着し、笠被のあるものも認められる。



第6図 出土遺物実測図(2)

(3) 鑑 (第6図3)

鑑金具は、玄門部西壁際から発見されたもので、一部を欠損しているが、およそ形状を知ることができる。引手蓋は棒状の引手の先端を環状にしてつくり、反対側を二連式の街に連結している。引手の現長は22・2cm、径が1・2cmで、街は両端を環状に曲げた径0・7cm、現長8・8cmの棒状の鉄でつくられ、外径6・9cmの円形の鏡板を連結している。

4 土器 (第6・7図)

皇子塚古墳から検出された土器は、須恵器・施釉陶器・土師器・弥生式土器・内耳土器などの完形品、および破片であり、石室内から弥生式土器片と覆土中から内耳土器およそ2個体分などが検出されたことは注目される。

(1) 須恵器 (第7図)

今回の調査で検出された須恵器は、菱門部で発見された完形の細頸瓶と提瓶、高坏片、环の蓋、墳丘の周縁から発見された壺の破片などである。

a 細頸瓶 (第7図1)

菱門部西壁際から、口縁を壁側に向けて倒れた状態で検出された完形品である(図版4)。口縁は外反り内彎の嘴状を呈し、口径は7・4cm、口頸部は弱い弓なりのカーブを描いて胴部に接着し、最小径は8・9cmである。胴部は径18・4cmの2個の环形土器をロクロ整形によってつくり、口縁を合わせて接合した後、更に接合された胴部の上部に穿孔を穿って口頸部を接着している。従って、底部は丸底で、瓶全体の高さが19・15cm、口径：器高の比が1：2・6につくられている。器面は青褐色で一部が酸化劣化によって赤褐色を呈し、ロクロ痕がよく残っている。

b 提瓶 (第7図2-1・2-2)

菱門の西側壁際から、積石に押し潰された状態で発見され、復元の結果ほぼ完形の提瓶となつた。口縁は外反り嘴状で、強い棱角をつくり、口径が7・25cm、口頸部の径が4・2cmで弓なりにくびれ、なだらかに胴部に続いている。胴部は2個の环を接合して扁球形につくり、肩に2個の鉤状の耳をつけている。胴部の正面は正円形で径が14・8cm(2-1)、断面の横径が10・2cm(2-2)、一面がやや球形、反面はおよそ平面

につくられ、上部に痕孔を穿って、別につくった口頸部を接合している。器面は青褐色を呈して、ロクロの擦痕がよく残り、器高は20・4cmである。

c 高杯・器台形土器（第7図 4・5）

提瓶の東脇から5の器台の杯部が、更に南脇から4の器台部破片が検出された。杯部の口径は12・8cmで、口縁が緩く内凹し、やや立ち気味に反って下腹に続いている。器面の中脇と下脇には、長方形の孔がつくられ、それぞれの上方に2条の凹帯が刻まれている。器面は青褐色を呈し、部分的に縁釉がかかり、また内面には黒い斑点がみとめられる。器体の形状は、焼き崩れによって、かなりゆがんでいる。4の器台部は整形がよく、底部は緩く開いて末端を斜めに削り、嘴状につくられている。器高：底部径の比は1：1・3で、器面は灰褐色を呈し、ロクロの擦痕がよく残っている。

d 有蓋壺（第7図 6）

蓋部の破片で、口径が14cm、嘴状外反りの口縁の上に、太い嘴状の鉤をつけ、緩くカーブして上脇に続いている。器面は青褐色を呈し、ロクロの擦痕がよく残っている。

e 蓋

いずれも小破片で、器形は明らかではないが、器面のたたき目の上に、縁釉かかり、内面には青海波文のたたき目がつけられている。

(2) 施釉陶器（第7図 8）

直口壺の口辺部と上脇部の破片が、墳丘の北麓周縁から検出された。口縁は緩く外反りして、口径が13・4cm、頸部で「く」の字形にカーブして、張りのある肩に続いている。胎土は淡黄褐色を呈し、内面に縁釉がかかっている。頸部は破片のため、全体の器形は明らかでない。

(3) 土師器

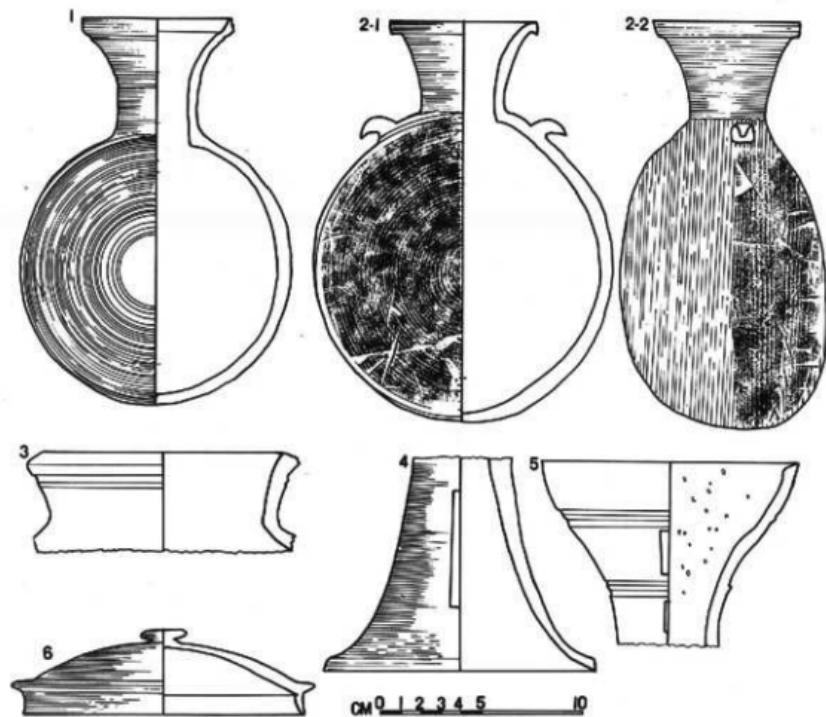
壺・高杯・菱形土器などの小破片で、規模・形状は明らかでないが、いずれも石室内から検出されている。

(4) 弥生式土器

赤色塗彩のある箱清水期の高杯の小破片で、石室内から検出されている。

(5) 内耳土器 (第6図 5・6)

5の口縁は緩く外反りし、口径 $24\cdot1$ cm上肩でわずかに弓なりの外反りカーブを描いて、内轉気味に底部に統いている。底部は平底で、径 $23\cdot1$ cm、器高が 17 cmである。器面は茶褐色を呈し、かなりのヌスが付着し、内面には2個の環状の把手がつけられている。6は口縁から下肩でかけて、緩く弓なりに外反りし、下肩で内轉して平底の底部に統している。器面は茶褐色を呈して、かなりのヌスが付着し、内面に2つの環状の把手がつけられている。口縁の径は $29\cdot6$ cm、底部径が $19\cdot9$ cmで、高さが $20\cdot8$ cmである。2個の器形は、いずれも浅鉢形で、器面の状態と出土状況から推考して、煮飲用に使われ



第7図 出土遺物実測図(3)

ていたものと思われる。

5 「穴」字墨書のある石器（第6図）

玄門部西側壁際の提瓶の上に、これを押し潰したような状態で検出され、石皿の左隅に、上から矢印、「」状の棒、その中に「穴」の字が記されている。台の石は、安山岩を用いた石皿の破片で、平面形が横19・7cm、縦左辺11・6cm、右辺8・5cmの梯形状を呈し、断面は横21・7cm、左辺高さ6・9cm、右辺高さ3・8cmの楔状を呈する。石皿の表面は、緩くくぼんで摩滅し、永年の使用がうかがわれる。出土地点は、墓前祭に使われたと思われる細脛瓶の完形品（第7図1）、提瓶の破片（同図2）、高环片（同図4・5）などを伴出した比較的の保存の良好な部分であり、これら伴出土器と同期の遺物と考えるのが最も確実な推考と思われる。しかし、この墨書き石器が、どのような意味をもつのか、必ずしも明らかでないが、次項で年代の推考とともに、若干の考察を試みたい。

6 古銭（第5図）

玄室内の覆土上層から検出された古銭は、開元通宝（10）・明道元宝・皇宋通宝（11）・元豐通宝（7）・政和通宝（9）・嘉定通宝（8）などの唐銭・北宋銭・南宋銭などと寛永通宝（12）1枚である。出土地点は、西側壁際の奥壁より90cm付近が大部分で、1枚が西側壁より80cm、奥壁より887cmの玄門部付近である。このうち明道元宝・皇宋通宝・元豐通宝・政和通宝・嘉定通宝などの宋銭は、質の悪い私鋳銭で、寛永通宝と併せていろいろことながら、江戸前にここで博打をやったとの伝承を裏書きするものであろう。

V 考 察

1 塩田平における古墳の立地

塩田平には古墳時代中期に比定される王子塚古墳をはじめ、南西面する小牧山塊の東山を中心とし、東信地方最大級と推考される古墳時代後期の下之郷古墳群があり、その数76基を数えることができる。⁽¹⁾

塩田平には、産川を中軸として、西山麓に湯川、東山麓に尾根川が流れ、その下流の緑合瀬を、西には追跡沢川、東には尻無川が流れている。そして、産川系には砂質礫土、湯川系には強粘土、尾根川系には砂礫質礫土と三つの川は、土質の組成にも大きな役割を果してきた。塩田平はこれら河川を骨組として、南方から北方に向って狭隘となる扇状を呈し、中軸の産川流域地籍を中心に、上流の山麓扇状地一帯には、彌文前期ごろから弥生後期・古墳時代・歴史時代にわたる広範な遺跡が分布し、河川の流域では縄文期の遺跡が川沿いにやや下降している。また、中流地域では、河岸段丘上や自然堤防状の微高地に、弥生後期から古墳時代・歴史時代にわたる遺跡が多く、特に産川中流域の上本郷・五加、そして古安曾地籍の北部には、分布が濃密で出土遺物の量も多く種類も多様である。この生活面に対して、泥宮地籍のような低湿地が広く生産面として利用され、したがって灌溉の発達によって、耕地の拡大が行なわれたものと思われる。⁽²⁾

塩田平の古墳は、大部分がこれらの遺跡群や生産面を眺望する丘陵台地や山腹、あるいは山麓・扇状地上にあり、また、南西面の小牧山塊の山腹や山麓に、東信地方最大級の代表的な群集墳が形成されている。この群集墳は、径20m~80m前後のBクラスの円墳を中心にして、10m~15m前後のJクラスの円墳が數基でこれとブロックをつくり、地形に沿って、いくつかのブロックが集めてブロック群を形成し、更に大きくて東山古墳支群と紅平山古墳支群・糞雀古墳支群となり、全体として下之郷古墳群を構成している。⁽³⁾

糞雀古墳支群は、立地からみれば、丘陵台地上に分布するもので、この立地に分類されるものには、上田女子短大裏の前中山古墳、山田の横山塚古墳・北ノ沢古墳、八木沢の池田山第1・2号墳、保野の口明塚古墳などがある。皇子塚古墳は、女神岳東麓に発達した舌状台地の脊梁上にあり、眼下に塩田平を一望する絶佳な立地条件にある。この古墳も、塩田平の分類では、一応このグループにいれてよいであろう。

第3の立地は、扇状地上に分布するグループで、産川沿いのケチャケ塚古墳と東村屋村

古墳・宮原第2号墳・別所の将軍塚古墳・上塚古墳・大塚古墳・尾根川沿いの平井寺古墳・町屋古墳・三門寺古墳などがある。そして、塩田平における最古・最大規模といわれる王子塚古墳も、このグループに入る古墳と考えられる。

皇子塚古墳は、彦川西岸の豊富な遺跡群と生産面に対応するものであることは、この地域の古墳の分布からみて明らかである。しかし、王子塚古墳との関係や、クチアケ塚古墳・東緑原村古墳との編年的関係は、これらの古墳の調査資料が充分でないこともあって、現段階では説明することができない。また、皇子塚古墳に対応する生活面(集落)、生産面の関係も、一つにはこれら遺跡の調査が、表探による分布調査の域を出ていないこと、根本的には文献史料を伴わないこの時期の研究の限界といえる。⁽⁴⁾ 藤森栄一先生は、「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」において、多くの示唆を与えており、多くの古墳研究は、墳墓としての古墳の追究にとどまり、生活・生産という社会構造、あるいは支配関係や構造という側面を欠いている。われわれ研究者は、このことを深く反省しなければならない。

2 丘・石室の規模と構造からみた皇子塚古墳の考察

皇子塚古墳の墳丘は、東西径と南北径がともに14.8m、高さが3.8mという規模の古墳時代後期のCクラスの盛土円墳である。規模の点では、他田塚古墳の東西径17.2m、南北径が18.5m、高さが東西約4m、北東麓約8mより小さく、更に他田塚古墳北東の塚穴原第1号墳の径約27.2m、高さが約8.2mよりも、更に小規模である。そして、構造上も盛土によって構築し、周囲に葺石を用い、墳丘にも部分的に葺石を認める比較的普通の手法によっている。こうして墳丘の面から考察する皇子塚古墳は、格別問題にすべき所見はなく、むしろその優れた立地と皇子塚古墳(あるいは王子塚古墳)という名称の由来に興味がもたれる程度であり、立地の点からは、この地域を支配し、代表する者の墳墓であることが、十分うなづける。しかし、それが直ちに伝承のごとく、塩焼王、あるいはその子某の墳墓に結びつけられるものではない。この伝承については、【項の12ページ】で考察したので、本項では重複をさけるため、記述を省略した。

皇子塚古墳の石室は、奥壁幅：奥行き全長の比が1:3.02につくられている短軸な袖なし型横穴式石室である。袖なし型横穴式石室の分布は、現在までの調査では、塩田平⁽⁵⁾一円と依田川流域を東限とする地域、千曲川の北岸では依田下流の和の一部、西部は湯川西岸の川西丘陵付近と考えられる。この依田川と和の境界地域では、袖なし型と両袖型の石室をもつ古墳が混在し、神川の流域では、両袖型と片袖型、あるいは片袖が縮約した両

袖型が混在している。これがどのような理由によるものか、現在の段階では十分解明されていない。⁽⁷⁾ 尾崎喜左雄氏は、袖なし型を最古も古い形式とし、弊穴式石室の狭壁の一つをうちねいて、墳丘外部に開口したものとしているが、上小地方では袖無型横穴式石室が終末期の群集墳の中に存在し、「コ」の字形勾玉など新しい時期の副葬品を伴い、少くともこの地方の古墳の調査結果とは一致しない。現在までの調査結果から推考すれば、石室にみられる袖なし型・両袖型、あるいは片袖型や両袖型の片袖縮約形式は、いずれもその形式の中に、新旧の年代的変化をうかがうことができる。こうした資料を総合すれば、前にも論及したが、石室の形態的差異は、地域的政治的勢力に関連する文化的な要素の影響によるものと考える。袖なし型石室の編年は、狭長な石室から7世紀初頭からはじまり、7世紀中ごろからは短軸な箱形の石室が出現するといわれる。⁽⁸⁾

古墳名	形式	玄室(CM)			侯道(CM)		B+C
		A奥壁幅	高さ	△奥行き	△奥行き	侯門幅	A
・皇子塚	袖なし型	202	208	400	210	148	1:8.02
・他田塚	△	165	250	630	365	145	1:6
・神宮寺	両袖型	217	218	445	325	129	1:8.55
・仲浦野	△	245	180	552	—	—	1:2.24
・仲塚田	△	128	188	288	119	88	1:2.72
・蛇川原	△	157	215	806	359	97	1:4.2
・将軍塚	△両袖型	190	290	500	350	150	1:4.47
・保新屋1号	△△	196	—	385	155	100	1:2.5
・仲塚穴	片袖型	178	146	260	110	—	1:2.13
・下脇木	△	180	115	845	315	104	1:8.66

第7表 石室の形態と計測値 (●調査済(未)未調査 △片袖縮約型)

第7表の奥壁幅：石室奥行き全長の比によって推考すれば、他田塚古墳が7世紀はじめの築造、蛇川原古墳が7世紀中ごろ、神宮寺古墳が7世紀後半の中ごろの築造と考えられるので、皇子塚古墳の築造年代は、7世紀後半の末期に近い時期と考えてよからう。⁽⁹⁾

また、齊藤志博士は、側壁や奥壁の石積について、直立壁に対して天井に向ってしだいに持ち出し、縮約する形式をより古い形式としている。因に他田塚古墳の側壁は、天井に

向っておよそ15°傾斜し、神宮寺古墳は約10°。(玄室中央は、側壁がせり出し、現状は部分的に約15°である。しかし保存のよい部分の数値は、約10°)である。これらに比して、皇子塚古墳の石室は、保存のよい玄室部が約5°で、ほとんど直立壁に近く、崩落している後部は12°前後の勾配をもつ。この計測値の幅年は、およそ形態比の幅年と一致し、皇子塚古墳の築造年代を決定する根拠と考えることができる。

また、側壁の石積みは、いずれも上部に面のある自然石を乱積み状に小口積みにしているが、他田塚と神宮寺古墳の基礎石は大型であり、奥壁の石積みは前者が基礎に2枚の大石を並べて、上部を小口積みにしているのに対し、後者は上下に2枚の平石を重ねて築造している。後者の築造法は、東部町和の蛇川原古墳と同じ手法で、側壁の基礎石は、蛇川古墳より一見してかなり大きい。しかし、他田塚古墳と蛇川原古墳の基礎石は、いずれも面のある角石であるが、神宮寺古墳は大きな板石を立てて用いている。そして皇子塚古墳の基礎石は、かなり小型化した平石を用い、奥壁にも特に大きな石は使われていない。この変化を幅年すれば、7世紀はじめの側壁の基礎には、かなり大型の角石が使われ、7世紀中葉ごろに向ってしだいに小型化し、7世紀の後半には、これに代って見かけの大きい板石を立てて使うことにより、大石を運ぶ労力と経費を節減し、これもしだいに小型化して、末期には外見上では中葉の石積みに似たものになる。これは大化の改新を経て、中央集権的律令国家に隸属し、経済的にもしだいに弱体化した地方豪族が、權威のシンボルともいえる墳墓に最も深く投影した実態を伺うことができる。現在までの調査で収集した終末期の上田市内の古墳の資料は、すべてか基礎石に中規模以下の板石を立てて用い、外見上を大きく見せるようにしたものであった。

3 出土遺物に関する考察

装身具の勾玉は、第5図5・6の2個だけであるが、5はC形に近いが、前期のようなスマートさではなく、太く鈍重で、6は明らかに終末期の硬直した「コ」の字形を示している。2個の管玉は、碧玉製で形は比較的大きいが、太形の後期の特色を示している。しかし、玉類の組み合わせは、出土量がきわめて少なく、構成を推考することができない。

須恵器は鬼高式年行期と推考される。細頸瓶の手法と形態は、飯田市川路の殿村第1号墳出土の瓶に類似するが、皇子塚出土の瓶は、口頸部がやや短軸で太形である。細頸瓶の口頸部の幅年の変化は、やや短軸な太形の形態から、長頸・細形の形態に変化するようである。

また、提瓶の器形は、他田塚古墳出土の瓶に比して、口頸部が細身で、手法はたたき目

を用いず、ロクロ輪形している。しかし、高环器台部の器形・手法は、他田塚古墳出土の
下に近似し、ともに有窓である。

有窓の器台形土器の用途は、墓前祭に際して、神酒などを供獻する細頸瓶をのせたもので、器形は高环より内壁のカーブが強く、下部の底も五領期の土師器と同様に有孔で焼がれていない。

このように皇子塚古墳出土の須恵器は、県下にも比較的類例の少ない完形の好資料を検出しているが、これと比較検討する出土資料が乏しく、今後の調査の進展に期待して、再検討の機会を得たいと思っている。

更に上層から検出した内耳土器は、スヌの付着状態などから、煮炊用の土器であったと考えられる。古墳内から内耳土器の検出例は、東部町和の蛇川原古墳でも知られ、どのような状況の下であったか明らかでないが、陶口された古墳の石室が、中世の一時期各地で居住用に使われていたことが知られる。

検出された武器の鉄製直刀や鉄鎌、そして馬具の帯に、いずれも腐食が激しく、また一部が欠損しているので、詳細に検討できない部分が多い。しかし、直刀は他田塚や蛇川原古墳出土の太刀のように、金銅装などは認められず、極めて質素で実用的な持えである。また書道具も、引手と円形の鏡板、二連の舟といった機能上の最低の構造を残して、立脚など一切の飾りを捨てている。こうした副葬品の細部に、被埋葬者の質素な武人的性格と、7世紀後半といり歴史的時期の中央集権的律合体制下における地方豪族の姿を伺い知ることができる。

4 皇子塚古墳の築造年代等の考察

前8項で考察した諸点を総合すれば、皇子塚古墳は、7世紀後半の終末に近い時期に築造されたものと考えられる。そして、被埋葬者は、地方豪族としての武人的性格をもつ人物により考えられるが、他田氏との関係は推考すべき資料が乏しいので、今後の研究に待たなければならない。

伝承との関係でも問題になる追葬は、2次的棺床は認められず、行なわれたとしても、同期の既定された時期に、同族の範囲の追葬程度が推考されよう。調査の所見では、出土遺物の時期に余り多くの差異がなく、また攪拌のために、嚴格な分析ができないことを配慮しても、上記の推考に大過はあるまい。しかし、石室外の墳丘周辺からは、やや新しい施釉陶器片などが検出されているから、被埋葬者に関連するものか、東脇の皇子塚現に関係するものは明らかでないが、いずれにしても墳丘の東麓付近で、なにかの祭礼的供獻が行なわれたと考えられよう。

そして、鎌倉期の後半ごろには、すでに石室が開口され、一時的に居住の場となり、江戸期以後には、伝承のごとく、博打場等に利用されたことが、出土遺物等によって明らかである。

5 「穴」字墨書のある石器

この石器は、完形の縦掘廻の脇から、同じ肩位の提瓶の破片の上に、これを押し潰したようす状態で検出された。従って、この石器（縦文期の石皿の破片を利用したものと思われる）に書かれた「穴」字の墨書は、これらの須恵器と併行する時期、すなわち鬼高Ⅱ期のものと考えられる。県下で古墳内から墨書き土器が検出された例は、佐久市一本御古墳出土の「久」字墨書の高台付・オホ（土師器）と長野市松代の大室古墳群北谷支群第425号墳出土の高台付皿底部（須恵器）の2例がある。¹⁴⁾前者は第1棺床から出土した国分期の土師器で、8世紀後半の追葬時の副葬品。後者は、埴丘棺部から出土した須恵器で、古墳に直接関係のない遺物と推考されている。これらに比して、皇子塚出土の墨書き土器は、伴出した須恵器の時期から7世紀末ごろと推定され、石器に書かれた墨書きとしても注目される。

墨書きの「穴」字は、「今昔物語」の「我ガ死ナム日ヘ穴ヲ同クシテ共ニ可埋シ」とか、「漢書」哀帝紀の「死則同穴」、あるいは「玉篇」の「穴、家墳也」のように、墓穴の意味にも使われている。出土位置から「穴」字墨書きの石器は、墓穴を意味する「穴」の字と、石室を描いた「形の絵、そして上の矢印は方向を示したものと考えたい。しかし、こうした特殊な遺物は、比較すべき事例がないので、先学諸兄のご示教をいただきたい。

註1 小林幹男「上田市の原始古代・文化」 1974年 上田市教育委員会

註2 川上元・小林幹男「長野県小県郡塙田町林木遺跡緊急調査報告」

信濃22-8

註3 小林幹男「他田塙古墳発掘調査報告書」 1973 上田市教育委員会

註4 鹿森栄一「古墳の地域的研究」 1974 永井出版企画

註5 五十嵐幹雄「長野県小県郡依田地区的古墳」 信濃22卷第10号

註6 五十嵐幹雄「古墳時代の和村」 1959 和村誌

註7 尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」 昭和41年 吉川弘文館

註8 桐原健「信濃」 学生社

同著「信濃における終末期古墳の姿相」 信濃22卷第3号

註9 註3と同じ

註10 小林幹男「蛇川原古墳緊急発掘調査報告書」 1974 東部町教育委員会

- 註11 小林幹男「神宮寺古墳調査報告書」 1974 上田市教育委員会
- 註12 斎藤忠「日本古墳の研究」 昭和37年 吉川弘文館
- 註13 土屋長久「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」長野県考古学会誌18
- 註14 大室古墳群調査会「大室古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書」長野県
- 註15 山田孝雄「今昔物語集三」日本古典文学大系24 岩波書店
- 註16 諸橋轍次「大漢和辞典 卷八」 大修館書店

あとがき

今回の調査は、「皇子塚古墳」が上田市指定文化財となったのを機会に行なわれた。調査の施行と報告書の作成に当っては、できるだけ事実に即して忠実に、細心の注意を払って記述した。この報告書が斯学のために、そして文化財の保護と保全のために、少しでも役立てば望外の喜びである。もし私の願いが少しでも満足されるとしたら、それは調査に協力された諸君の献身的努力と、上田市教育委員会をはじめとする関係機関の文化財保護への熱情の賜物である。ここに重ねて深く敬意を表し、感謝を申し上げる。

「皇子塚古墳」は、われわれ上田市民の財産であると共に、またわれわれ民族の尊い遺産である。文化財保護の現状は、必ずしもこうした認識の下で進んではいない。特に、「皇子塚古墳」の現状は、すでに美道部が傷つき、玄室部も早急に保全措置をとらなければならない。上田市当局をはじめとして、市民のあたたかい保護と愛護の努力を期待してやまない。

1974年11月 小林幹男

上田市指定文化財 皇子塚古墳発掘調査報告書

1974年12月15日 印刷

1974年12月20日 発行

著 者 小 林 幹 男

発 行 者 上 田 市 教 育 委 員 会

上田市大手1→11→16

印 刷 所 (株) 双 葉 印 刷

上田市上川原柳町③-1122代